Cantillon の手稿本 "*Essai*" について

津　田　内　匠

経済思想史上に名高い Richard Cantillon の名がはじめて世に現われたのは，1734 年 5 月 14 日のロンドンでの殺人放火事件の被害者としてであった。その後 21 年して，経済学者 Cantillon の名がはじめてフランスに現われる。もちろん 1755 年に匿名で出版された *Essai sur la nature du commerce en général. Traduit de l'Anglois.* A Londres, chez Fletcher Gyles, dans Holborn. M.DCC. LV. の著者としてである。著者についてはほとんど知られていなかった。まして著者の死後，出版までの事情についてはなにも明らかでなかった。しかし反響はただちに相ついだ。出版から約ひと月後，Grimm は 7 月 1 日，15 日，8 月 1 日の 3 回にわたって *Correspondance littéraire* で，Fréron は 8 月 4 日づけ *Année littéraire* で，*Essai* をとりあげている。さらに，これまで指摘されたことがないが，*Journal des sçavans* 9 月号も長文の紹介を行っている。いずれも *Essai* を最良の経済学書の一つとしており，同時に，それが表題のように英語からの翻訳ではなく，もともとフランス語によるものと断定している。著者がしばしば参照を指示している Supplément——興味深い各種の計算がふくまれている——が *Essai* に付けられていないこともまた一致して惜しまれている。出版の事情がいっさい不明であったというのに，手稿にかんする断定はいささか異常と思えるが，この手稿と出版と Supplément とについての問題が，当初からつきまとい，今日にいたるもなお解き明かせぬ *Essai* の謎の基本部分である。

この謎そのものは Cantillon 個人に属するものであるが，英仏古典経済学の接点に立ち，重商主義と重農主義とを分かつ経済思想史上の分水嶺の役割を持つ *Essai* の謎の背景は Quesnay の *Tableau économique* の成立直前のフランス経済思想史のいまだ十分に明らかでない部分と深くかかわっているように思われる。私は先年，幸いにして *Essai* の手稿本の存在を知ることができた。そのテクストは現在印刷中である。ここでは，この資料について若干の解説を加え，*Essai* 前後の経済学文献の書誌的状況のなかで *Essai* の謎の解明に多少とも接近したいと思う。その成功はとうていおぼつかない。結果はおそらくいっそう謎を深め，ただ混乱を増すばかりとなろうが，書誌的な新しいいくつかの事実を示すことを，なによりも目的としている。

Mirabeau は *Essai* の手稿を 16 年間持っていた。かれは Rousseau にそう告白している[1]。*L'ami des hommes* の序文によれば，Mirabeau はこの手稿にもとづいて，Cantillon に対する自由な論評の形で一書を発表しようとしていた[2]。その痕跡は今日 Mirabeau 文書(Archives nationales) 中の M. 779 "Essai sur le commerce en général" と M. 780 "Mémoire (–Essai) sur la population" にみることができる。M. 779 は Cantillon の *Essai* を約 1/3 に抜萃し要約したものであるが，最初の 11 章は省略され，他にも改変が加えられている。Mirabeau は「無味乾燥」な *Essai* に手を加えて読みやすいものにしようとしたともいっている。[3] M. 780 は全体が *L'ami des hommes* の最初の草稿とみなされるものだが，Cantillon に対する自

1) Lettre de Mirabeau à Rousseau, De Saint-Maur, le 30 juillet 1767. *Correspondance générale de J.-J. Rousseau*, par T. Dufour. Tome XVII, Paris, 1932. p. 176.

2) *L'ami des hommes*. Ire partie. Avignon, 1756. Préface.

3) "Mémoire sur la population". Papiers de Mirabeau. M. 780. Archives nationales. cf. Note liminaire, par L. Salleron, in Cantillon, *Essai*, éd. I. N. E. D. Paris, 1952. LXVIII–LXXII.

由な論評はこの前半の部分にみられる。Mirabeau は *Essai* のほんのはじめの部分を多少書き変えながら自著を準備していたが，途中で書記に *Essai* そのものを書き写させ，余白に自由な論評を書き加える形式に変更した。しかしこの方法もやがて変更される。たぶん *Essai* の手稿の返却を求められたために，かれはその後 *Essai* を書き写すことをやめて，*Essai* の第II部の最後の章までの分に対する論評を書きつけている。こうして，*Essai* の手稿は第I部第7章の半ばから第II部第6章のはじめの部分までが偶然 Mirabeau 文書に姿をとどめることになったのである。よく知られている Mirabeau の *Essai* と Supplément とについての証言は，このM. 780 冒頭の部分にある。それは，*Essai* の手稿を長年持っていながら発表しなかったことの一種の弁明であるが，かれはその理由を Supplément のついていない *Essai* は不完全であったからとのべている。この説明はあまり説得的ではないが，かれの証言は興味深い。「この著作ははじめ英語で書かれた。著者(はじめ Cantillon と書いて消している)はかれの親しい一友人のために自分自身でこれを訳したが，Supplément [の翻訳] を他日にのばしたので，それはかれのほかの文書類とともになくなった」。実は Mirabeau は M. 780 の別の箇所でも *Essai* についてのべている。M. 780 の後半，"Essai sur la population. Troisième partie. Avant-propos" と題する部分である。前述のように，Mirabeau は Cantillon に対する論評の形で自著を書きすすめたが，*Essai* が出版されてしまったので，急に方針を変更せざるをえなくなった。"Essai sur la population" はやがて *L'ami des hommes* となるのだが，この "Troisième partie. Avant-propos" は出版のさいに削除されている。Mirabeau は "Avant-propos" で，Fréron の書評にふれて，つぎのように書き残している。「私がその批評をみた雑誌は真の著者の名をあげていた。ただ，この論考がフランス語から英語に訳されたとのべているのはまちがいである。もはや秘密ではないのだから，私は名前をいってもよいのだが，Cantillon 氏はそれをもともとかれの生来の言語である英語で書いたのである。かれはそれを，かれの友人の一人で私の友人の一人でもある人——私はかれから手稿を手に入れた——のために翻訳した。かれは，著作の数箇所で語っているSupplément を訳す時間がなかった。そのためSupplément は，22年ほど前の奇怪で悲惨なある異変のために，かれとかれのほかの文書とともになくなってしまったのである」。これによれば，Supplément は1734年の事件で焼失している。しかし，この Supplément について，Mirabeau は M. 779 で，「ある有能な人が……作らせた計算を私はみたことがある」とものべている。Fréron も Supplément について，「数人の人が私に確かにそれを手稿でみたと請合ってくれた」とのべている。Mirabeau は手稿についての Fréron のまちがいをわざわざ訂正したが，Supplément についての Fréron の記述には不同意を示していない。Supplément の手稿はまだどこかにあるだろうか。

手稿にかんして Mirabeau の証言が正しいとすれば，英語の手稿が存在するはずである。*Essai* の出版に先だつこと6年，1749年に出版された Postlethwayt の *A dissertation on the plan, use, and importance of the universal dictionary for trade and commerce* のなかに，すでに *Essai* からかなりの引用があることが指摘されている。当時フランス語の手稿は Mirabeau の手もとにしかなったのだから，Postlethwayt は英語の手稿を用いたにちがいない，と Higgs は推定している[4]。Mirabeau の手稿は全体の半分弱にすぎないのだから，英語とフランス語のそれぞれ完全な手稿と，できれば Supplément の手稿とがみいだせればよい。英語の手稿はまだみつからないが，フランス語の完全な手稿はルアン市立図書館にあった。Collection Leber (919) "**Essay de la nature du commerce en général**." 158 feuillets, 187×130 mm, がそれである。残念ながら Supplément はついていない。

Jean-Michel-Constant Leber は1780年オルレアンの生れで，フランスで有数の書誌学者であっ

4) Higgs, H. Life and work of Richard Cantillon, in Cantillon, *Essai*, ed. by Higgs. London, 1959, p. 383.

た[5]。かれは1809年内務省統計部に入り，以後30年間，フランスで行われる重要な書物や資料の売立てを逃がさず追い求めた。かれのテーマは最初，宗教史であったが，しだいに対象をフランス史一般にひろげ，ついには政治経済学文献にも及ぶようになった。かれの編集になる *Collection des meilleures dissertations, notices et traités particuliers relatifs à l'histoire de France*, 20 vol. は高い権威を持っている。1838年，かれはぼう大なコレクシオンを終身使用権を留保してルアン市立図書館に売却した。Leber は1859年に死去し，1860年コレクシオンは完全に同図書館の所有となった。Leber が *Essai* の手稿を入手した経過を示す記録は残されていないが，かれは手稿を Cantillon のものと知らずに購入していたようである。手稿本の扉に，かれは「全体の様子からみて，18世紀はじめの未発表手稿」と書きこんでいる。この資料はおそくとも1884年には閲覧可能であった。

ルアンの手稿は，しかしオリジナルではない。読みあげられて書きとられたものである。しばしば行がとんだり重複したりしている。argent comptant は argent content, ville hanséatique は ville asiatique となり，Louis XIV は Louis IIII となっている。読みちがいと聞きちがいが重なると，celle d'Antonin l'an de l'Ere (III. ch. 4) となるべきところが，cette Dantonin lan de laire となっている。Mirabeau は，Cantillon はフランス語を完全に知っていたが，フランス語で公刊されるとは思わなかったし一友人のために訳したのであるから，フランス語の言いまわしにはこだわらなかった，とのべている[6]。ルアンの手稿にも，同一語の繰りかえし，語順の無視，英語的表現との混同等がみられる。le manger le boire l'habillement les maisons lits etc (刊本では la nourriture, le vêtement et le logement) といった素朴な表現がしばしばみられる。cependant des etats et domaines という表現には estates という英語が頭にあったのだろうか。これは mais plusieurs domaines (II. ch. 8) と刊本で訂正されている。

ルアンの手稿には系統的な単語のまちがいがある。confiance は conscience, exportation は exploitation と記されている。これらのまちがいはそのまま Mirabeau の手稿にもみられる。意味不明の notre Curgre (I. ch. 6) (刊本では notre Europe) も Mr. Xing (刊本で Mr. King) という特殊な書き方も，I. ch. 14 の表題中の誤字 usades (刊本で usages) も，Mirabeauの手稿と同じである。ルアンの手稿は改行のさいに最初の語を下げて書く方法を取っていない。だから前のパラグラフの最後が右の端いっぱいで終ったとすれば，新しいパラグラフの区切りはつけにくい。この場合，ルアンの手稿は最初の文字を多少大きく書いて見分けのつくようにしているが，Mirabeau の手稿は，こういう場合いつも改行になっていない。Mirabeau の手稿はルアンの手稿を写したものだろうか。2つの手稿の間に異同がある場合，それはルアンの手稿の判読しにくい箇所であることが多い。両手稿にはある近親関係があるように思えるのである。

Essai のテクスト中には，意味のはっきりしない箇所や明らかにまちがいではないかと思われる箇所がいくつかあって，これまで研究者を悩ませてきた。ルアンの手稿はこれらの問題にある解決なり示唆なりを与えている。たとえば，有名な時計のバネの例 (I. ch. 10) である。刊本で「1対1」とあるのは明らかにまちがいである。Higgs はこれを Postlethwayt のテクストを参照して「1対1,000,000」としたが，Postlethwayt の別の書物[7]でも Mirabeauの手稿でも，それは「1対1538460」である。ルアンの手稿ははっきりと「1対1,538,460」である。また第2部第8章に échet という見かけない単語がでてくるが，英訳者 Higgs はこれに hitch という訳をあて[8]，1952年版 *Essai* の編者は *La grande Larousse* に依って脚注で redevance と説明している[9]。ルアンの手稿では

5) 以下，Leber については，*Notice sur la vie et les ouvrages de M. Leber*, par M. A. Taillandier. Paris, 1860; "Nécrologie. M. Leber", *Gazette des Beaux-arts*. 1860. p. 188. を参照。

6) Note liminaire, par L. Salleron, *op. cit.*

7) *Essai*, ed., Higgs, p. 29. cf. Higgs. Life and work of Richard Cantillon, p. 385.

8) *Ibid.*, p. 193.

9) *Essai*, éd. I. N. E. D. p. 106, note (3).

echec である。これは単なる誤植がもたらした混乱であった。第Ⅲ部第6章の冒頭で，100人の地主が各自10,000(dix mille)オンスを預けるとする云々と刊本にあるのは，ルアンの手稿によれば1,000(mille)オンスのまちがいであった。例をもう一つ。第Ⅲ部第8章の最後のところで à crever la bombe とあって，「奇妙な表現」とされるが[10]，ルアンの手稿では à gâre la bombe(ご用心)であり，印刷のさいにこれを誤って crever と読んだものと思われる。こうしてみてくると，ルアンの手稿は Mirabeau の手もとにあって印刷に用いられたもののように思えてくるのだが，ルアンの手稿のつぎの最大の特徴は，そう考えることを拒否している。第Ⅲ部第4章「貨幣として用いられる諸金属の価値の変動」の第18パラグラフ，刊本で Monsieur Newton m'a dit とあるところが，ルアンの手稿では，いったん Mr. Neuton(*sic*) m'a dit と書かれたらしいが，その後 m'a に相当する部分がインクで黒々と塗りつぶされ，さらに鋭利な刃物でその部分だけ切り取られている。すぐ裏のページはたまたま行間であったが，そのつぎのページの，刊本では $65\frac{1}{2}$ となっている部分の65がいっしょに切り取られてしまっている。この箇所は Cantillon が Newton と知己であったことを示すものとして重要視されるところであるが，この異常な訂正のされ方は，それが誰によってなされたにせよ，Cantillon と Newton の関係を強く否定するものとうけとられるのである。この手稿が印刷の底本となったとは考えにくい。とすると，Mirabeau の手もとにあった手稿は印刷に用いられたというのであるから，ルアンの手稿は Mirabeau の手稿とは全く別に存在していたのかもしれない。

Essai の出版の翌1756年にも *Essai* はもう一つ出版されている。タイトル・ページその他のヴィニェットやフルロン(いずれも装飾模様)とページ数が変ったほかは，重要でないヴァリアントがみられるだけで，内容に変更はない。出版は同じく A Londres, chez Fletcher Gyles である。この年もうひとつの版が現われる。Mauvillon の版である。かれは1754年に *Discours politiques de Mr. David Hume. Traduits de l'anglois. Par Mr. de M****.* A Amsterdam. chez J. Schreuder, & Pierre Mortier le Jeune. MDCCLIV. を翻訳出版したあと，1754～56年に *Discours politiques* というタイトルで『ヒュームの政治論集』のいわば続篇(第2巻～第5巻)として，同時代の政治経済論を出版する。Cantillon の *Essai* は第3巻の後半を占めるのである。これまで知られていないが，この Mauvillon 版は1769年に再版されている[11]。出版は A Amsterdam, chez J. Schreuder だけに変っている。Mauvillon の56年版は Gyles の1755年版を用いずに，Gyles の56年版を台本に用いており，Mauvillon の69年版は，2つの Gyles 版を用いずに，Mauvillon の56年版に拠っている。Mauvillon 版はテクストとしての学術的価値に乏しいが，*Essai* がどのような形で読まれたかという点で重要である。ともかく *Essai* は，こうして18世紀中に4つの版を持った[12]。

1881年に Jevons がまさに画期的に Cantillon を発掘したとき，かれは *Essai* の出版社 Fletcher Gyles が架空のものであったことを指摘した[13]。

10) *Ibid.*, p. 173.

11) この版は，私の知るかぎり，世界で唯一東京経済大学図書館に所蔵されている。

12) イタリア語訳は1767年に出版された。*Saggio sulla natura del commercio in generale. Autore inglese.* Venezia, 1767. [10], 298 p. これは Scottoni の翻訳であるが，かれは1769年に，これを再刷している。しかし訳者が，タイトルを変えて，Hume の論集からの抜萃としたために，これまで一度も Cantillon の *Essai* のイタリア語訳として注目されなかった。*Saggio sul commercio relativamente alla primaria sua base l'agricoltura. Opera estratta dalla celebre raccolta inglese del Sig. Hume.* Prodotta ora in Italiano dal P. M. Scottoni. Venezia, MDCCLXIX. 298. [2] p. 訳者が1767年版で autore inglese と記しているのは Cantillon ではなく，Hume のつもりだったのだろう。Scottoni は Mauvillon 版 *Discours politiques* 第3巻を用いて，Cantillon を Hume と誤ったかもしれない。

13) Jevons, W. S. "Richard Cantillon and the nationality of political economy." *Contemporary Review.* January 1881, p. 67. cf. *Essai*, ed. Higgs. p. 341.『『国富論』の成立』経済学史学会編，東京，1976年，この点の詳細については津田「チュルゴ」164–165 ページ参照。

その後 Higgs は，Foxwell の所蔵する *Essai* の巻末に Barrois 出版社の『目録』がついていて，そこに *Essai* がふくまれていることをあげて，*Essai* の真の出版社は Barrois であるかもしれないと主張した[14]。Hayek はこの説を支持したが[15]，Anita Fage はほかに同じ『目録』がみいだせないことで疑念を表明している[16]。Fage の疑念も肯けるが，ただそれだけであれば，高橋誠一郎教授も Barrois の『目録』つきの *Essai* を所蔵しているし[17]，まえにのべた *Journal des sçavans* の書評にも A Londres, chez Fletcher Gyles, dans Holborn, & se trouve à Paris chez Barois(*sic*), Libraire, Quai des Augustins. と記されていることをあげれば，それだけ疑念は薄らぐことになろう。しかし私は Barrois は *Essai* の真の出版社ではなく，単なる一取扱い書店にすぎなかったと考えている。私は高橋教授の *Essai* を検討する機会をいまだ持っていないので，著書『古版西洋経済書解題』に掲載されている『目録』の第3ページの写真版を検討してみた。このページにみられる *Essai* を除く10点は宗教および教会関係書と法学書で，その出版社を調べてみると，Barrois 社の出版物は一点もないのである。Catalogue des Livres, Qui se trouvent chez Barrois というのは，文字どおり，店に置いてあるという意味である。

Essai の広告は他の本の巻末にもみることができる。アミアンのアカデミーは51年度から懸賞論文を募ることにし，その独占的出版権をゴダール未亡人に与えた。Clicquot-Blervache の1756年度当選論文の巻末[18]につぎの広告がみられる。カッコのなかに著者と訳者を補っておく。LIVRES DE COMMERCE qui se trouvent chez la Veuve Godart. Théorie & Pratique du Commerce & de la Marine, *un volume in 4°* (par Uztáriz, trad. par Forbonnais). Le Négociant Anglois, *2 volumes.* (éd par Ch. King, trad. par Forbonnais). Essai sur la Police générale des grains, *1 volume in 12.* (par Herbert). Essai sur les intérêts du Commerce Maritime, *in 12.* (par O'Heguerty). Essai sur la nature du Commerce en général, *in 12.* (par Cantillon). Remarques sur les avantages & les desavantages de la France & de la Grande-Bretagne, par rapport au Commerce, *1 vol. in 12.* (par Plumard de Dangeul). Elémens du Commerce, *2 vol. in 12.* (par Forbonnais). Discours politiques de M. Hume, sur le commerce, *2 vol. in 12.* (trad. par Le Blanc). Dictionnaire de Commerce, par M. Savary, *3 vol. in folio.* L'Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des Sciences, des Arts & des Métiers, *10 vol. in folio.* (par Diderot). L'Atlas universel, de M. Robert de Vaugondy. Dictionnaire Géographique, par Monsieur Vosgien, *in 8°*. Dissertation sur la cause qui corrompt & noircit les grains de bled, par M. Tillet, *deux parties in 4°*. Avis-Pratiques sur les bleds noirs. Utilité des Voyages. (par Baudelot de Darival). Voyages autour du monde, par l'Amiral Anson, *4 vol. in 12.* Histoire générale des Voyages, par M. l'abbé Prévost, *in 4° & in 12.*

以上のうち，Savary の『商業辞典』以下は辞典類と実用書と旅行記であるが，前の8点は，まさに問題としている Cantillon については判断を措くとして，すべて Vincent de Gournay の強い影響下にあった周辺の著述家たちである。この排

14) Life and work of Richard Cantillon, by Higgs. in *Essai*, ed. Higgs. p. 381.

15) Hayek, Fr. von Richard Cantillon, sa vie, son oeuvre. *Revue des sciences économiques*. Liège, avril 1936, p. 94.

16) Fage, Anita "La vie et l'oeuvre de Richard Cantillon (1697–1734)", in *Essai*, éd. I. N. E. D. XL–XLI.

17) 高橋誠一郎『古版西洋経済学書解題』東京，昭和18年，710ページ参照。

18) *Dissertation sur l'état du commerce en France, depuis Hugues Capet jusqu'à Fransois I. Qui a remporté le Prix, au jugement de l'Académie des Sciences, Belles-Lettres & Arts d'Amiens, en l'année 1756. Par M. Clicquot-Blervache, de Reims.* Crescit eundo. A Amiens, Chez la Veuve Godart. Imprimeur du Roi, de Mgr. le Duc de Chaulnes & de l'Académie. Et se vend à Paris, chez Ganeau, rue Saint Séverin. Chaubert, Quai des Augustins. Lambert, rue de la Comédie Françoise. M. DCC. LVI. Avec privilège du Roi. pp. 95–96.

列は偶然ではない。Gournay のシャトーはアミアンの南 50 キロほどの地にあり，かれはしばしばパリからシャトーに行き，アミアンに出むいてアカデミーを指導していた。アカデミーの独占的出版人であった Veuve Godart が「商業書」について Gournay からなんらかの指導をうけたことは大いにありうるからである。

上記の「商業書」のうち，Hume の *Discours politiques* については多少説明する必要があろう。1754 年には，なぜか Hume の *Discours politiques* が 2 種類出版されている。一つは広告にみられる Le Blanc の 2 巻本で[19]，もう一つは，やがて続篇として Cantillon の *Essai* を収録することになる Mauvillon の 1 巻本である。出版は Mauvillon のものが早かったようである。Le Blanc は第 1 巻に長文の訳者序文(iii–1viii)をつけ，第 2 巻の終りに 2 つの特殊なビブリオグラフィーをつけて出版した。Notice de quelques-uns des principaux ouvrages anglois sur le commerce (pp. 388–395) と Ouvrages sur le commerce, les finances, &c. cités dans les notes sur les Discours de M. Hume, & qui ont paru en France depuis deux ans (pp. 397–417) である。Le Blanc のこれらの仕事には Gournay の影響がはっきりと認められる[20]。かれは訳者序文でいまや交易を国家的事業みなすべきであるという Gournay の未発表の議論を展開している[21]。これは，Gournay が Child の *A new discourse of trade* のフランス訳を準備したさい(1752 年)，Child の著作の各章に "remarques" をつけたが，発表を禁止されて未発表となっていた文書のなかにある議論である[22]。かれはまた，Gournay が上記未発表の "remarques" で推賞したイギリスの経済学者たちを第 1 のビブリオグラフィで解説つきで列挙し第 2 のビブリオグラフィでは，「ヒューム氏の論集の注に引用された」著作よりもむしろ「二年来フランスで出版された」Gournay 周辺の著述家たちの著作をあげている。かれは Hume の翻訳者としてよりも[23]，むしろ非常に偏った形ではあるが，早い時期の経済学のビブリオグラファーとしての名誉を担っている。この第 2 のビブリオグラフィーが，Mauvillon の *Discours politiques* 第 2 巻以後の編集に大いに活用されていることは明らかである。そしてビブリオグラフィーそのものも，Ouvrages sur le commerce, les finances, &c. qui ont paru depuis deux à trois ans. と改題され，多少の変更が加えられて，第 2 巻に一個の労作として収録されたのである。Mauvillon はこのビブリオグラフィーの収録にあたって，当時最新の問題作であった abbé Coyer の *La noblesse commerçante* を最後につけ加えている。

さて，Fletcher Gyles 社は架空の出版社であったが，この実在しない Gyles 社の出版物が，1755 年に 2 点，1756 年にも 2 点実在した。1755 年のひとつは，Cantillon の *Essai* で，もうひとつは，Turgot による Tucker の *Reflections on the expediency of a law for the naturalization of foreign protestants* の翻訳 *La questions importantes sur le commerce, à l'occasion des oppositions au dernier bill de naturalisation. Ouvrage traduit de l'anglois de Tucker, Recteur du College de Saint Estienne à Bristol, & Chapelain de l'Evéque de Bristol.* A Londres, Chez Fletcher Gyles, dans Holborn.

---

19) *Discours politiques de Monsieur Hume. Traduits de l'anglois.* A Amsterdam, et se vend à Paris, Chez Michel Lambert, Libraire, rue & à côté de la Comédie Françoise, au Parnasse. M. DCC. LIV. 2 vol.

20) Le Blanc は 1755 年の新版で，名をあげずに Childの訳者 (Gournay) を「ヨーロッパのありとあらゆるさまざまな商業に精通し，しかもわが国の発展に役立ちうることにひたすら専念する市民」と呼んでいる。*Discours politiques de Monsieur Hume, Traduits de l'anglois. Nouvelle édition. Par Monsieur l'Abbé Le Blanc.* Tome premier. A Dresde, chez Michel Groell, Libraire & Marchand d'Estampes. M. DCC. LV. p. 257.

21) *Discours politique*, xliv–xlvii.

22) 津田「Vincent de Gournay の未発表資料——Josiah Child の "A New Discourse of Trade" のフランス語版への "Remarques" (1752)——(I–1), (I–2).」『経済研究』第 27 巻 3 号(1976 年 7 月)，第 28 巻 1 号(1977 年 1 月)参照。

23) Grimm は，Le Blanc だけでなく Mauvillon の飜訳の拙さを指摘している。*Correspondance littéraire*, par Tourneux. Tome II. Paris. p. 293.

M. DCC. LV. である[24]。1756年の一つは，まえにのべた Cantillon の *Essai* で，もうひとつは，これまで Cantillon との関連では言及されたことのない abbé Coyer の匿名出版 *La noblesse commerçante*. A Londres, chez Fletcher Gyles, dans Holborn. M. CDC. LVI. である。

この4つの Gyles 出版のうち，問題の Cantillon の2つの *Essai* を除けば，あとの2つはいずれも Gournay と密接な関係にある。Turgot の翻訳が Gournay の勧めで出版されたことはよく知られているので，ここでは Coyer の著作について簡単にふれておこう。Coyer の商人貴族論は没落する小貴族の救済のために，貴族が身分を奪われることなく交易に従事することを認めよという主張である。貴族が領地経営のための資本を得るために，まず海運と交易に従事し，それによって農業を再建しマニュファクチュアを振興することは，いまや国民大半の願いである，というのが主張の骨子である。この議論に，君主政体と商業は両立しうるかという Montesquieu の『法の精神』における政体論の問題が絡み，また窮迫した貴族の子弟が結婚を遠ざけて，人口増殖を妨げているという人口論議が加わって，商人貴族論は当時の社会問題をひろく包含する大議論に発展した。賛否両論の渦巻くなかで，Coyer の *La noblesse commerçante* は 1756年中に5つの版を持った。そのうちの一つが Gyles 版であり，他の4つは Duchesne 版である。Coyer に対する反論 *La noblesse militaire* [par chevalier d'Arcq] もまた 1756年中に4つの版をだしている。また両者に対する賛否の議論は，私の知るかぎり，1756年から 1760年にかけて19の小冊子で出版されている。この間にあって Coyer は *Développement et défense du systéme de la noblesse commerçante. Par M. l'abbé Coyer*. A Amsterdam; et se trouvent à Paris, Chez Duchesne, Libraire, rue S. Jacques, au-dessous de la Fontaine S. Benoît, au Temple du Goût. M.DCC.LVII. を発表して批判に答える。かれはそこで，Gournay と同じく自由放任とともに航海条令による保護主義を主張し，Gournay を「ある計算家」と匿名で呼んで，かれの未発表メモワールからの数字を用いている[25]Coyer は，さきにのべた Hume の翻訳者 Le Blanc と同様，Gournay の未発表メモワールを読む機会を持っていたのである。さらにまた奇妙なことに，この論争の間に，A Paris, De l'Imprimerie de la Noblesse Commerçante という発行所の記された小冊子が2つも現われている[26]。*La nobblesse commerçante* の発行所とされているのは F. Gyles と Duchesne

24) 前出。津田「チュルゴ」164–165 ページ参照。I. N. E. D. 版 *Essai* の編者たちは，Turgot のこの本について不思議な注を2ヵ所につけている(XL, p. 29)。すなわち，Cantillon の *Essai* と同じ出版年と同じ出版社をもつ Turgot の訳書はその第2部18節の注ですでに Cantillon の *Essai sur le commerce* の参照を指示しているが，Tucker の原著は 1751–1752 年に書かれたものである。Cantillon の *Essai* の出版以前に，Tucker が Cantillon の *Essai* の参照を指示しているということは，Tucker が執筆の時に Cantillon の手稿を持っていたということだろうか，それとも他の *Essai* のことをいっているのだろうか？ この解決はむづかしい，というのである。しかし，この問題は簡単に解決する。この混乱は，編者たちが Tucker の原著や Turgot の *Questions importantes* の原版を参照せず，Schelle 編の *Oeuvres de Turgot* で代用したことに起因している。Schelle は編集のさい，Turgot の原版から，つぎの下線の部分 l'essai sur le Commerce, pag. 92 de la deuxieme Edit., chez T. Trye Holborn, を削除し，*Oeuvres* では l'Essai sur le commerce のあとに注をつけて，*l'Essai sur la nature du commerce* de Cantillon (p. 93. Londres, 1755) を参照するように指示したのである。Schelle には *Essai sur le commerce* は Cantillon のものという予断があり，それが Fletcher Gyles dans Holborn ではなく，T. Trye Holborn と記されていることに当惑して，上のように処理したものと思われる。Turgot の訳版に相当する箇所を Tucker の原著でみれば，the *Brief Essay on Trade*, 2d Edit. Page 92. printed for *T. Trye, Holborn*. と記述されている。ここに指示されている本は，Tucker 自身の *A Brief essay on the advantages and disadvantages which respectively attend France and Great Britain, with regard to Trade*. …… The second edition ……London: Printed for T. Trye, near Grays-Inns Gate, Holborn. MDCCL. である。編者たちは，Cantillon の *Essai* の英語の手稿に神経質になりすぎていたのだろうか？

25) Coyer, *Développement*, p. 38; Papiers de Gournay, Man. 83. Bibliothèque municipale de Saint-Brieuc. "Mémoire" (Sans titre). Début: Il n'y a dans tous les pays du monde que deux classes d'hommes qui contribuent à en augmenter les richesses;……fol. 313 verso.

だけであるから，「商人貴族の印刷所」とは両社に共通する印刷所である。この2つの小冊子もまた F. Gyles と密接な関係にあったと考えるべきだろう。

およそ以上が，私の書誌的にみた Cantillon の謎の周辺である。*Essai* の真の出版社はいまだ明らかではない。*Essai* の真の出版人も特定できない。しかし Cantillon と Gournay の間に鮮明ではないが，あるなんらかの関係があったことは確かなように思われる。Gournay は「無視された完全な著作」Cantillon の *Essai* を「真剣に」読むように人々に勧めていた[27]。たしかに *Essai* は出版当初から「無視され」る傾向にあった。Gournay はこの傾向に懸命に抵抗していたようにみえる。Jevons は Cantillon を Smith に先駆するものと理解し，Higgs は Cantillon を重農主義の父として位置づけた。まさしく Quesnay は，Mirabeau とともに，Cantillon をいち早く学んだ一人である。Turgot もふくめて，Quesnay とその学派が Cantillon に負うところは，かれらが僅かに表明している[28]以上に重大だった。しかし Quesnay は市町村落の形成にかんして Cantillon をただ一度引用し，Mirabeau も大著 *L'ami des hommes* のなかで，二度 Cantillon に言及したにすぎない。Turgot は Melon の経済学上の功績についてのべるさい，生涯にただ一度，しかも私信のなかで，Cantillon の名をあげただけである。内外の新刊書の紹介に熱心だった *Journal oeconomique* は，ついに一度も *Essai* についてはふれなかった。やがて Dupont de Nemours は重農主義の形成にかんして先駆者たちの業績を評価するとき，Cantillon よりもむしろ穀物取引きの自由化論で重農主義に近かった Herbert を高く評価するのである[29]。もっとも熱心に Cantillon に言及しようとしたのは，私の知るかぎり，Morellet であった。かれは，*Dictionnaire du commerce* の編集のために，*Essai* からの引用を十分に用意した。しかしかれの *Dictionnaire* が未刊に終るとともに，かれの Cantillon に対する高い評価もまた人知れぬものとなった[30]。すくなくともフランスでは，Cantillon を忘れ去ることは，すでに経済理論の建設を放棄し，政治的な一党派に傾斜して非現実的な経済政策に熱中した重農学派そのものによって始められたといえよう。Quesnay の直前に経済学を模索した Gournay とその周辺の著述家たちも，この同じ潮流のなかで，あるいは伝説化され，あるいは忘れ去られることとなるのである。

(一橋大学経済研究所)

26) *La noblesse oisive* [par Rochon de Chabannes, M. A. J.]; *La noblesse commerçable, ou ubiquiste.* [par Marchand, J.-H.]

27) Morellet, *Mémoires*. Paris, 1821, Tom. I. p. 37.

28) Lettre de Turgot à Caillard, 1 Janvier 1771. *Oeuvres* (*éd. Schelle*) III, p. 500; Quesnay, article "Grains" dans l'*Encyclopédie*, 1757; Mirabeau *L'ami des hommes*. Avignon, 1756, Ire partie, chap. II et VII.

29) Dupont de Nemours, "Notice abrégée des différents écrits modernes qui ont concouru en France à former la science de l'économie politique", dans l' *Ephémérides du citoyen*. 1759, tom. I. xvi. かれは *De l'origine et des progrès d'une science nouvelle*. A Londres, et se trouve à Paris, Chez Desaint, 1768 では Cantillon に言及さえしていない。

30) Papiers inédits de Morellet. Ms. Fonds général 2504, 2520 etc. Bibliothèque municipale de Lyon.